

「ロトとの別れ」

2020年12月02日

「あなたの前には広大な土地が広がっているではないか。さあ私と別れて行きなさい。あなたが左にと言うなら、私は右に行こう。あなたが右にと言うなら、私は左に行こう。」(創世記13章9節) ロトがヨルダンの低地一帯を見回してみると、主がソドムとゴモラを滅ぼされる前であったので、その辺り一面は、主の園のように、またエジプトの地のように、ツォアルに至るまであまねく潤っていた。そこでロトは、ヨルダンの低地一帯を選び取った。(創世記13章10節～11節a)

アブラムは一族を連れ、ファラオから受けた家畜や銀や金などの多くの財産を携え、エジプトを出て、ネゲブに上って行った。ネゲブからさらに、最初に祭壇を造ったベテルまで来て、主の名を呼んだ。飢饉は収まり、新しい生活を始めることができた。

この地で、アブラムは羊や牛を飼いながら、財産を増やしていった。甥のロトも家畜を飼い、大きな成功を収めていた。アブラムとロトの家畜が増えると、牧草が足りない状況になった。アブラムの牧童とロトの牧童の間で、自分の主人の家畜を有利に増やそうと、牧草の取り合いの争いが起こるようになった。アブラムはロトに言った。「私たちは親類どうしなのだから、私とあなた、また私の家畜を飼う者たちと、あなたの家畜を飼う者たちとの間で争い事がないようにしたい。あなたの前には広大な土地が広がっているではないか。さあ私と別れて行きなさい。あなたが左にと言うなら、私は右に行こう。あなたが右にと言うなら、私は左に行こう。」親類同士が争うより、別々の地域で、家畜を飼うようにしようと提案したのである。アブラム一族の長は、もちろんアブラムである。彼は、父親を失ったロトの後見人として、面倒を見て来た。別々の道を進むに際し、主導権はアブラムにある。それなのに、ロトに選択の優先権を与えている。ロトが独り立ちして、逞しく生きることを期待したであろうし、アブラムは、どんな地域が与えられようと神の守りは必ずあるとの信仰があったのではないか。人柄の大きさ、信仰の確かさが見える。

「ロトがヨルダンの低地一帯を見回してみると、主がソドムとゴモラを滅ぼされる前であったので、その辺り一面は、主の園のように、またエジプトの地のように、ツォアルに至るまであまねく潤っていた。そこでロトは、ヨルダンの低地一帯を選び取った。」納得できる選択である。緑豊かな低地に行けば、更に、家畜を増やすことができる。ロトは、ヨルダンの低地を選び、東の方に移って行った。その地は、主に対して極めて邪悪で罪深い人々が住むソドムに近かった。ソドムは豊かさに溺れ、人々の心は荒廃した町であった。

アブラムはカナンの地に住んだ。ロトと別れた後、神はアブラムに、「さあ、あなたは自分が今いる所から北、南、東、西を見回しなさい。見渡すかぎりの地を、私はあなたとあなたの子孫に末永く与えよう。私はあなたの子孫を地の塵のように多くする」と、子孫を増やし、この土地を与えると祝福された。私たちは、神が地の塵のように多くすると約束されたアブラムの信仰を受け継ぐ子孫である。この言葉を、現在の、或るイスラエル人は神からの相続の言葉として受け止めているが、それは、了解することはできない。法的な言葉ではなく、あくまで、二千数百年前の神話的な記述であるからである。

アブラムはヘブロンに来て、マムレの榿の木の下に、主のための祭壇を築いた。アブラムは、どこに移住しても、祭壇を造り、主の名を呼んで、安全と祝福を求めている。神なしには生きられない緊迫した状況で、アブラムの真実を求める切なる求道であった。